就活生は「ガクチカ難民」

「絶望の淵に立たされた。つらかった」。東京都内の私立大学に通う4年の男子学生の1年は、二転三転の日々だった。２０２０年春に予定していた米国留学は就職活動に向けたステップアップの場と考えていた。それが新型コロナウイルス禍で、渡米数日前に中止となった。

慌てて前倒しで就活を始めたものの、志望企業の内定がかなわず心が折れる。「このままでいいのか」と思い悩んだ末に就活を中断し、休学を決めた。今は再び留学の道を模索するが、「思い描いてきた人生とは違うものになってしまった」

23年卒の今の3年生には、来春からの就活が本格化する前に新たな問題が浮上している。

11月中旬、首都圏の約40大学のキャリアセンターの関係者が集まった会議で、一人の私立大学の関係者の発言に各出席者が大きくうなずいた。

「今の学生は『ガクチカ難民』だ」

学生時代に力を入れたこと、いわゆる「ガクチカ」は企業が問う定番の質問だ。アピールポイントを見つけ出そうと、学生はサークル活動やアルバイト、留学にと精力的に動く。しかし、コロナ禍でその学生生活にぽっかりと穴が空いた。

エンタメ業界を志望する都内の大学3年の女子学生は、高校時代からぼんやりとガクチカを意識していたといい、1～2年生の間に見つけようと考えていた。ただこの2年、身動きがとれなかった。「自分、何もないな」。本格的な就活を目前に強い不安が押し寄せる。

□　□

就職情報会社のディスコ（東京・文京）によると、今年10月時点での22年卒の内定率は88・4％。21年卒から0・2㌽下回った程度で、全体として新卒採用は堅調にみえる。しかし、同社の7月の調査では「志望業界の変更を余儀なくされた」と回答した学生が2割弱にのぼった。第1志望の業界を断念した学生も少なくない。

「頑固に夢を追い続けていいのだろうか」。客室乗務員を目指していた青山学院大4年の女子学生は昨年9月、大きな決断を迫られた。

留学やエアラインスクールへの通学……。夢に向け万全の準備を進めていたが、新卒採用の中止・縮小を受け「ほかにもやりたいことに関われる機会はある」と志望業界をやむなく変更した。いまはマスコミ系企業に内定し、春を待つ。

就活戦線は激しさを増すばかりだ。21年卒からはインターンシップなどで事実上の採用開始時期はより早まり、出遅れた学生が苦戦を強いられる二極化が進む。リクルートによる22年卒対象の調査でも、3年生の10月以降に活動を始めた学生の内定率が4月時点で13・6%と前年の23・1%から大幅ダウンした。

先輩たちの慌てぶりを間近に見てきた下級生は活動時期を早め、疲労の色を濃くする。

青山学院大の進路・就職センターにはコロナの感染拡大が本格化した20年春以降、これまでにない事態に戸惑い相談を希望する学生が増え始めた。「情報を取りにいけない学生をどう救い上げるかが課題」と同センター部長の祖父江健一は危惧する。

□　□

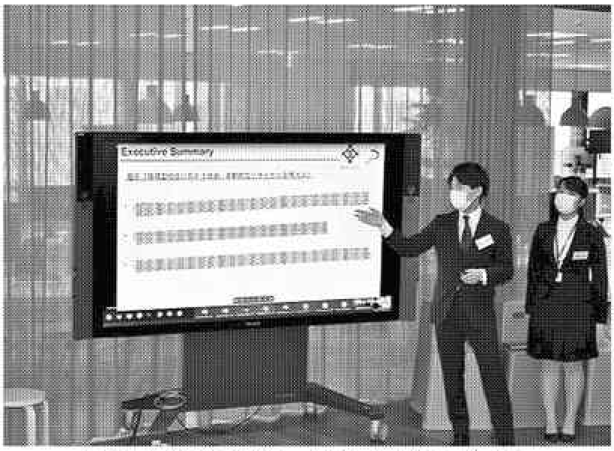
ガクチカに関する設問を取りやめた企業は一部にすぎない。多くの企業は従来通り、「エピソードや人柄を聞き出したい」との採用方針をとる。危機感を募らせた大学側は「実戦」の機会をつくるために動き始めた。

明治大学は昨秋以降、キャリア支援を目的とした低学年向けのプログラムを実施する。4～7月にはツイッター・ジャパン（東京・中央）が協力。学生がツイッターの新機能を考案し、社長にプレゼンテーションする機会を設けた。就職キャリア支援部長の舟戸一治は「大事なのはコロナを前向きにとらえて取り組めるか。この経験を次の挑戦につなげてほしい」。

「就活エリート」だった体育会学生も抱える事情は同じだ。慶応大の運動部出身のOB・OGは11月から有志で現役学生向けに業界説明会を実施した。企画した20代の蹴球部OBは「他大学とも協力して少しでも手助けをしたい」と話す。もがく学生を救うための支援の輪が少しずつ広がる。（敬称略）

◇

コロナ禍に見舞われる大学生は「令和のロストジェネレーション」になる恐れがある。難局に臨む大学生の今を追った。



学生たちはインターンシップにこぞって参加する（3月、三井物産提供）

掲載日 2021年12月14日 日本経済新聞 朝刊 2ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。